

新刊紹介

古川敦編

『牧口常三郎の教師論』

富岡比呂子

牧口常三郎が抱いていた教師像とは何か。そもそも教師とはどのような職業なのであろうか。牧口は教育という営みにおける教師の役割を非常に重視していた。本書は創価教育学の視座から「教師の使命と社会的責任」について論じている。編者の古川氏は『牧口常三郎と創価教育学』『幸福に生きるために——牧口常三郎の目指したもの——』をはじめとした牧口や創価教育学に関する著作を持つ研究者である。この本のテキストはすべて『創価教育学体系』（全四巻）からの抜粋からなっており、編者の解説を参照しながら原典を読み込むことができ、『創価教育学体系』を一から読むのが難しいと思われる読者にとっては、理解しやすい手引書のような役割も果たしているといえる。

編者は、創価教育学を「教師の、教師による、教師のための教育学」と位置づけ、教師について、その本務、必要とされる能力、資格、技術、人格的資質などについて原典を参照しながらまとめている。第一章「教育技術者としての教師」では、教師に求められる資質として、すぐれた教育技術をあげている。「いかに知識の豊富な学者でも、もし教え方が下手であったならば、教わる学生が非常に困難する」と指摘し、今後の教師の仕事のもっとも大切な任務として、「教え方の上手、すなわち、教材の運用、児童の理解の徹底、記憶の徹底、その応用の徹底」（26頁）が必要であるとしている。通常、教師にとって大切な要素は豊かな人間性であるとされるが、牧口は、それだけでは十分でなく、あくまでも教育者として指導方法に熟達している必要があると論じている。創価教育学にある「知識する」という考え方——編者はそれを「みずから調べ、考え、吟味・検討し、自分らしく思索を深めていく」（29頁）という主体的な学習のあり方をさすのだとしている。つまり、創価教育においては単なる知識の伝授ではなく、学習法を指導すること、そうした子どもたちの学習をかたわらから援助する指導のあり方こそが重要であるとしている。創価教育学が科学的教育学であるとされる所以がここにあると言えるだろう。

第二章「教師の本質的な資格とは」では、教師養成者が着眼するべきところとして、知識構成の指導および学習指導方法の指導をあげている。第三章では、「美・利・善」の価値創造に着目した創価教育学の方法論を用いて、教育技術や教育方法について論じている。

本書の最終章である第四章「人間としての教師」では、教師の人格的資質として以下の五項目を提示されている。

- 一、教師は、指定の学習・生活指導をなす、精神的技術者である。
- 二、教育は、人格価値の創造を指導する、人間最高級の技術ないし芸術である。
- 三、一般教師が、子弟の目標または模範になるというのは、もつてのほかの妄想にすぎない。
まして、聖賢の業を気取るのは、僭越きわまりないことである。
- 四、教師は、子どもたちのために働く公僕であり、手本に導く伴侶にならねばならぬ。
- 五、教師は、子どもたちが「知識する」方法を身につけていくための、補助役である。(112頁)

この章で注目すべきは、教師の人格的素養として「正直の模範こそ教師の生命」と牧口が主張している点である。また、「利害の打算に目がくらんで、善悪の識別のできないものに、教育者の資格はない」(138頁)とあるように、確固たる善悪の価値基準を持つこともあげられているが、そこに「善」の価値創造(「道徳的創価」と表現する)を主眼にする創価教育学の理論が反映されている。教師自身がうそいつわりなく誠実な生き方を示し、正邪・善悪の判断を誤らないことが、何より子どもにとって必要であるということなのである。古川氏は、牧口のいう「大善」もしくは「極善」の生活が、人生の幸福につながる手段であり、「教育の最終的な目的は『善』の価値をどこまでも深く幅広く創造しゆくこと、すなわち、他者の不幸のうえにみずからの幸を求めるような『利己主義の幸福』ではなく、まさに『自他どもの幸福』の構築であるにちがいない」(137頁)とまとめている。教育の目的に照らして、教師とはどのような責任を持つ存在なのか、また、能力、人格的資質の観点からみると、教師とはどのような人間であるべきなのだろうか。本書は、教育という営みそのものを「教師」という視点から深く考えさせてくれる。創価教育学に興味がある人はもちろんのこと、実際に教職に携わる人や教職を志す人にぜひ読んでいただきたい。

(論創社、2010年)